園長通信～こころ～ №１４１

ドアノブ

2024.11.29

車に乗る。運転する。車から降りる。その際、どうやってドアを開けるだろうか。運転席のドアには、ドアノブが付いている。それを引いて、ドアを開けるのではなかろうか。では、このドアノブがなかったとしたら、どうやって降りるだろうか。ドアノブが折れて、使えなくなったとしたらどうするだろうか。

そんなことは起こらない。車のドアノブが折れたりしないだろうと思っている人が多いことだろう。だが、ドアノブが折れる車が実在するのである。運転席のドアが開かない。どうするか。助手席側から出るというのが常套手段だろうか。近くに人がいれば、外から開けてくださいとお願いするだろうか。そんなことをしたら恥ずかしい。変な人だと警戒される。

ドアノブが折れた車の持ち主はどうしたか。最初は、助手席から出てきた。ところが、なかなか面倒くさいし、やっかいである。では、どうしたか。エンジンをかけたままならば、窓を開け、取っ手に手が届く。そして、開けることができる。このスキルを身に付けた。人には見られたくない。

まずは、運転席のドアノブが折れた。しばらくして、助手席のドアノブが折れた。まさか、後部座席は大丈夫だろうと思っていたのが甘かった。運転席側の後部座席のドアノブが見事に折れた。ちゃんと使用頻度順に折れていく。こうなると、次は、助手席側の後部座席である。滅多に開けることはない。それでも、そのうち折れるのだろうと覚悟していた。その日がきたと思ったら、折れたのは、運転席のドアノブだった。２回目である。なるほど、使用頻度からすると、そうなるか。車の持ち主も、二度めは慣れたものである。スムーズに運転席の窓が開き、手が伸びてくる。そして、器用にドアを開ける。

一度、直したからといって、問題は解決しないことがわかった。この車に乗っている以上、使用頻度に合わせて、ドアノブは折れていくということだろう。この車のいいところは、何が起きても、「仕方がないな」と諦めさせてくれるところである。この車には、変な魅力がある。壊れるのは当たり前、修理しながら乗るのも当たり前、そんな気にさせてくれる。

そうは言っても、車の持ち主は容易ではない。いつドアノブが折れるのか。次は、何が起きるのかと心配が尽きることはない。だが、何だか楽しくなってくるから不思議である。笑うしかないというところだろうか。

運転席のドアノブは、修理して順調である。３回目に向かって、今のところはドアをスムーズに開閉してくれている。果たして、何年もつだろうか。楽しいやら、悲しいやらで、おもしろくなってくる。運転席の窓が開き、手が出てきて、ドアを開ける車があったら、この車である。クスっと笑いながら、温かく見守ってほしい。